

尋常修身教科書 卷二

3
40

検定合格本

K120/
75a
2

樋口勘次郎
野田瀧三郎
合著

常修身教科書卷一

東京 金港堂書籍株式會社



四	和氣清麻呂公	十五	平重盛公
三	和氣清麻呂公	十六	平重盛公
二	和氣清麻呂公	十七	平重盛公
一	和氣清麻呂公	十八	公園
五	法均尼	十九	二宮尊徳先生
六	菅原道真公	二十	父母に孝
七	菅原道真公	二十一	二宮尊徳先生
八	菅原道真公	二十二	二宮尊徳先生
九	菅原道真公	二十三	二宮尊徳先生
十	まこと	二十四	二宮尊徳先生
十一	鹽原多助	二十五	世のためにつくす
十二	鹽原多助	二十六	二宮尊徳先生
十三	鹽原多助	二十七	いさましき水兵
十四	ぎよーをならふ	二十八	義勇

常修身教科書 卷一

和氣清麻呂公(一)

一 和氣清麻呂公(一)

どーきよーといふほーしどきの
天皇にちかくつかへてわがまゝ多
し。

あるかんぬしうさ八まんのおつ
げといつはり天皇み位をどーきよー
にゆづりたまはば天下太平ならん。



と申し上げたり。
天皇まどひた
まひ清麻呂公を
うさにやりて神
のみこゝろをう
かがはしめられ
たり。

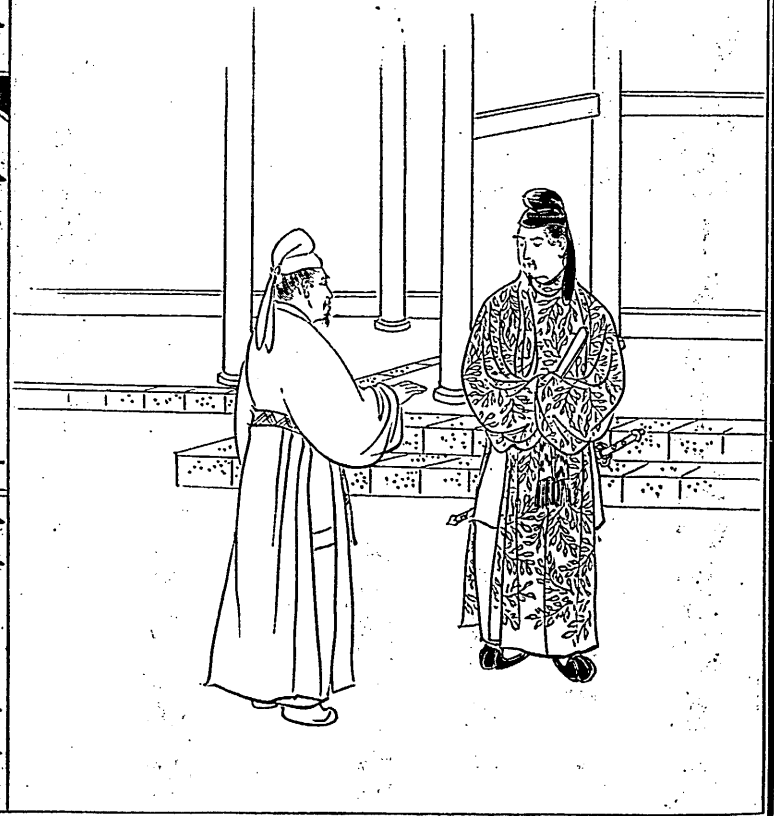
和氣清麻呂公(一)

二 和氣清麻呂公(三)

どーきよーは清麻呂公をおどして、
わがこゝろの如くせば、なんぢを大
臣とせん。もしたがはばいのちなか
らん」といへり。

清麻呂公は、このときなにごとも
いはず、そのまま、出で立たれたり。

清麻呂
公の友
その事
をさし
て、公を
はげま
したり。



三 和氣清麻呂公

清麻呂公かへりて、神のおつげを
申し上ぐ。そのことばに、

「わが國は昔より臣として、君とな
りしことなし。臣にして 天皇とな
らんとするものは、はやく、しりぞく
べし。」といふ。どーきよー、大いにいかり、



清麻呂公を大すみの
のくにへながした
り。
されど、のちどー
きよーはしりぞけら
れ、清麻呂公はみや
こつよびもどされ

たり。

よくちゆー。

四 法均尼

法均尼は清麻呂公の姉ぎみにて、
なさけふかき人なり。あるとき、きき
んにてすて子多くあり。法均尼八十
三人をひろひとり、みなかわゆがり

て、そだてあげ
られたり。



五 ひろくめぐむ

世にはふしあはせのもの多しな
にふそくなくくらすものがこれを
見ながらしらぬふりするはよろし
からずもしききんなどにて多くの
人々なんぎすることあらばそのみ
ぶんにしたがひてこれをたすけす



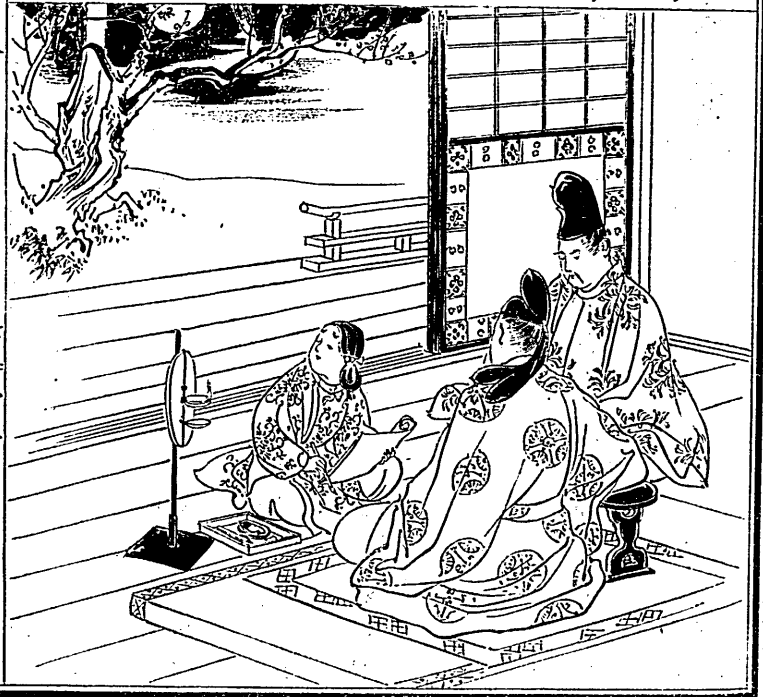
くふべし。

六 管原道真公スガハラノミチサダ(二)

管原道真公は父母の命をまもり、
幼き時より行正しくよくべんきよ
し、十一さいの時しをつくりて人を
おどろかしめられたり。

そののちもたえず、べんきよ一せら

れたれば、た
びたびしけ
んにきよーだ
いして、だん
だん、高きや
くにのぼら
れたり。



七 菅原道真公(三)

そのころ、藤原氏、わがまゝのふるまひ多かりしかば、時の天皇、これをおさへんがため、道真公を右大臣になしたまへり。

これが、道真公、なんぎにあはるるもとなりたり。

高い木
は
風に
あたる。



八 菅原道真公(三)

左大臣藤原時平トキヒラ道真公の重く用
 らるるをねたみ、公をのぞかんと
 して、しばく 天皇にざんげんを
 申し上げたり。
 これがため、道真公は、つひにつく
 しにしりぞけられたり。



九 菅原道真公(四)

道真公はつくしにありても、君をおもふ心、一日もやまずして、つひになくなられたり。

のち、そのつみなきこと明かになりたれば、天皇これをあはれみて、正二位をおくり、後の天皇また正



一位をおくりたまひたり。

人々道真公のちのいぎをしたひ、やしろをたてて、天まん天神とあがめたり。

ちのいぎのかがみ。

十 まこと

人はつねにまことといふことを、
心にわすれざるときは、あしきこと
をするおそれなく、またしぜんにさ
いはいをうべし。管原道真公は
心だにまことの道にかなひなば、
いのらずとても神やまもらん。

とよまれたり。

十一 鹽原多助シホハラタカスケ三

鹽原多助は上野カウヅツケの國の人なり。幼
き時、父を失ひて、なんぎしたり。
江戸に出でて、すみやにほーこー
し、朝は早くおき、夜はおそくねて、ほ
ねみををしまし、立ちはたらきたり。



十二 鹽原多助(三)

多助すみやにては、きゅーぎんをう
 けず。そのかはり、すみくづふるぞー
 りのごとき、すたれものをもらひて、
 ためおきたり。

このふるぞーりを主人、入用のと
 き、やくだてたることあり。



十三 鹽原多助(三)

十年あまり、すみやにほーこーして後、ためおきたるすみくづにて、じぶんも、すみやはじめ、大そーはんじよーして、名だかき商人となりたり。

ちりもつもれば山となる。



十四 ぎよーをならふ

人々のしよくぎよーはいろいろ

ちがふものなれど、各その國のため
 に、つくすものなれば、これにたうとき
 ものといやしきものとあるわけな
 し。

されば、人々はたゞ心を入れみを
 つくして、ぎよーをならひはげむべき
 のみ。

十五 平重盛公ヒラウケモリ①

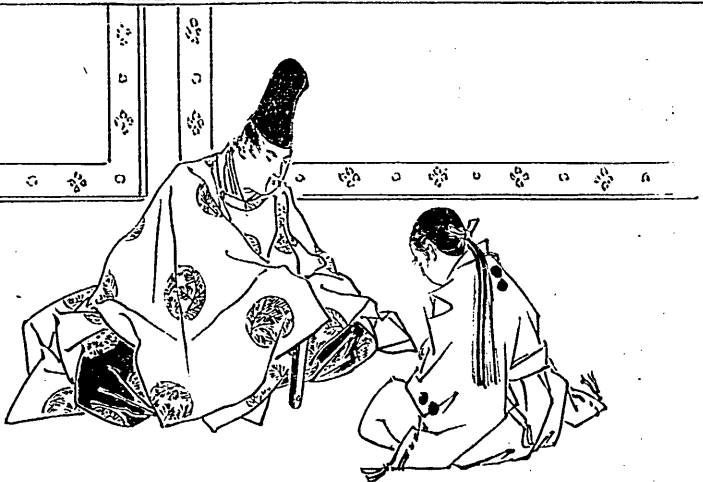
平重盛公、父清盛にしたがひて、熊野にまゐりたるに、そのるすをつけこみて、京都にらんをおこしたるものあり。清盛おそれて、いかにせんとまどひたるに、重盛公は「武臣、天皇のごなんにおもむくには、一日もゆるうすべからず」とはげ



ましどくがへりてぞくをうちやぶり、天皇を安んじたてまつれり。

十六 平重盛公(三)

重盛公は、又禮儀をたつとびたる人なり。二男、資盛、道にて、せしよー基房公にぶれいし、そのけらいにはづかしめられたり。重盛公、これをききて、資盛をしかりしに、清盛は、わが孫をはづかしむるは何事ぞ、とて、人をやりて、基房公を

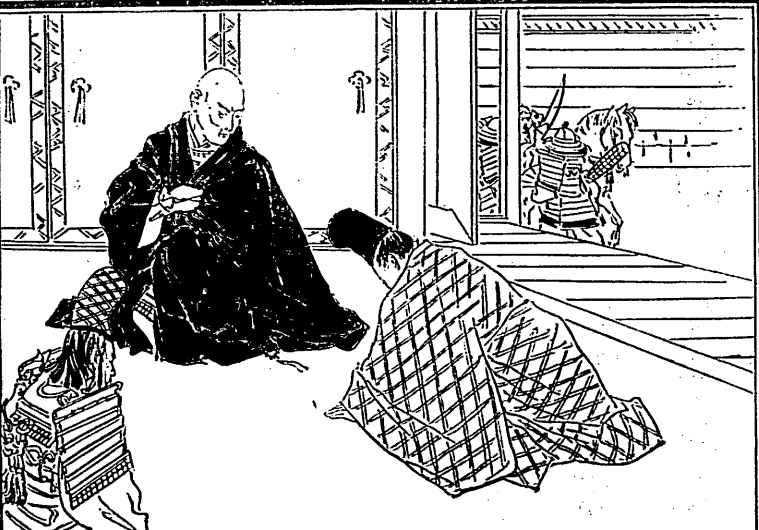


道にまちうけて、らんぼーをはたらかしめたり。重盛公、かくとききて、ふかくしんぱいせられらんぼーのけらいをしりぞけ、資盛をは

伊勢の國へおひやりたり。

十七 平重盛(三)

ある時、清盛怒ることありて、法皇をおしこめ奉らんとしたり。重盛公おどろきて、たゞちにはせ行かれ、なみだを流して「平家の一族は、ことに君の御恩を受けたるに、今その御恩をわすれた



もふは何事ぞや。この御くはだてをやめたまはずは、まづこの重盛が首をはねたまへ」といさめて、つひに父のあくじを思ひとまら

せたり。

十八 公園 コウエン

太郎と次郎と、公園に遊びたるに、次郎はもみぢの枝ををらんとしたり。太郎はこれをとめて、

「すべて、公園は多くの人がともぐにたのしくあそぶところですから、こ



こにある木や草などをそこねたり、又はをりとってじぶんひとりで、たのしむといふことは、よくありません。といひきかせたり。

私のために公をわするな。

十九 ニノミヤノシノブ 二宮尊徳先生 ①

二宮尊徳先生は相模サガミの國の人なり。幼き時より孝心深く、父母のびよーきにかゝられしときなどは、朝早くより夜おそくまで、ねる目もねずに、よく、かいほーせられたり。



ひまあるときは、わらぢを作り、その代にて、さげをかひて父にすゝめたり。かく心をつくしたれど、十四さいにて父を失ひ、十六さい

にて母を失ひたり。

二十 父母に孝

われらが生れてより、大きくなるまでの、父母のいろくのおほねをりはかぞへつくされぬほどなり。

父母の恩は山よりも高く、
海よりもふかし。

されば、父母の生きてゐらるるあひだによくこゝこゝをつくすべきなり。

子やしなはんとほつすれば、

親いませず。

二十一 二宮尊徳先生(三)

二宮先生は、幼き時より、學問をこのまれたれど、そのひまなかりしかば、本



をふところに入れ
おき、仕事のあひま
に出して讀まれた
り。
父母に死なれて
後、をぢの家にやし
なはれても、夜は机

に向ひたり。をぢはなさけなき人にて、
かかる無益のことに、油をつひやすべ
からず。と、きびしく、しかりしかば、先生
は、あれたる川中の地へ、あぶらなをま
き、そのたねを油にかへて、夜學せられ
たり。

二十二 二宮尊徳先生 ㊦



二宮先生をぢの
家に居られし頃ふ
るぼりの地をたが
やし人のすてたる
苗をひろひあつめ
て植ゑつけ人の休
む間に草をとりこ

やしをやりなどして、米を得られたり。
年もはや、二十ばかりになりければ、
をぢにいとまをこひて、わが家にかへ
り、そのいたくあれたるを、自らつくろ
ひてすまひたり。さて、またわづかばか
りのあれ地を求めてたがやし、夜を日
につぎて業をはげみけんやくをつと

め、ここに、年來の望なりし先祖の家を、
ふたたび、おこされたり。

二十三 二宮尊徳先生(四)

先生家をおこされて後、小田原侯の
家老服部氏より、ぐらし方の、甚だしく
つまりたるをと、のへんことを、たの
まれたり。



それより、先生種
種力をつくされ、五
年をへてその功全
く成りたり。服部氏
大いによろこび、あ
つく禮をのべ、いさ
さか、禮物のしるし

にとて、そこばくの金を進じたり。しかるに、先生は、一たん、これをうけをさめたれども、やがて、ことごとく、その家の召使の人々に分ちあたへて、その忠義をはげまし、自身は、つひに、一錢をも取られざりき。

二十四 二宮尊徳先生(五)

先生は、また、小田原侯の分家の領地なる下野シモツツケの櫻町といふ地、いたく、あれて、人々、大いに、なんざしたるをすくはれたり。

櫻町にては、先生、わが身先に立ちて、人をみちびき、耕作をはげましたり。されば、十年の後には、さしも、あれはてた

る土地、皆開けて、人々、大いに、安心する
ほどになれり。

二十五 世のためにつくす

人は一本立にて、この世をわたるこ
とはならざるなり。されば、たがひに、た
すけあひて、自分のしよくをつとむるに
も、たゞ、自分の利益ばかりを思はず、人

のためにもなることをつねに、心がく
べきなり。

二宮先生のごとく、自分のほね身を
をしまし、いろく、工夫して、世の益を
なしたるは、かんずべきことなり。

二十六 二宮尊徳先生(六)

二宮先生は、そのいさを、いちじるし



かりしかば、幕府に
めされて士となり、
日光神領のあれた
るをとゝのふるこ
とを命ぜられしが、
七十一歳にて病み
て失せられぬ。

明治十三年、忝なくも、朝廷、先生の功
をおぼしめして、その子孫に金をたま
ひ、二十四年に、正四位をおくらせたま
へり。今、小田原なる二宮神社といふは、
すなはち、先生をまつれる社なり。

二十七 いさましき水兵

黄^{ユイ}海^{カイ}のふないくさのとき、松島かん



に火事おこりて、その火、えんしよーぐらにうつらんとしたり。

このとき二人の水兵は、けふりと火との中をもつとも

せずして、かけまはり、自分のきものをぬぎて、くらの戸のすきをふさぎ、火の入らざるよーにふせぎたり。

いくさをはりて後、松島かの生きのこれる人々、くらのそとにくろこげとなりて、たふれおたる二人の水兵を見出したり。

二十八 義勇

わが國のむかしより、今に至るまで、すこしも外國のあなどりをうけざりしは、全くこの一大事るときには、君のため、國のため、身をすてて、つくすといふ勇氣あるが故なり。

義勇公に奉ずべし。

明治三十四年五月十四日印
同三十四年五月十七日發
同三十四年七月二十三日訂正再版印
同三十四年七月二十七日發

尋常修身教科書
定入四 卷一 金八錢 卷二 金十三錢
價入四 卷二 金八錢 卷三 金十三錢
卷四 金十三錢

著作權所有

著者 植口勸次郎
著作 野田瀧三郎
發行 金港堂書籍株式會社
印刷 兼
代表者 右社長 原亮一郎
賣捌所 各府縣特約販賣所

◎弊社ハ常ニ書籍ノ用紙印刷製本等ニ注意シ勉メテ其ノ堅牢ヲ期セリサレド多數ノ中萬一學年間ノ使用ニ耐ヘザルガ如キ粗製ノモノアラバ御通知次第無代價ヲ以テ御引換申スベク候
◎本書ハ僻遠ノ地ニ至ルモ定價ヲ超過シテ賣捌カシムルコトナキハ勿論直接ノ御注文ハ多少ニ拘ラズ運賃ヲモ負擔仕ルベク候

東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地

尋常修身教科書 卷三

3
40

檢定合格本

K20.1
75a
3